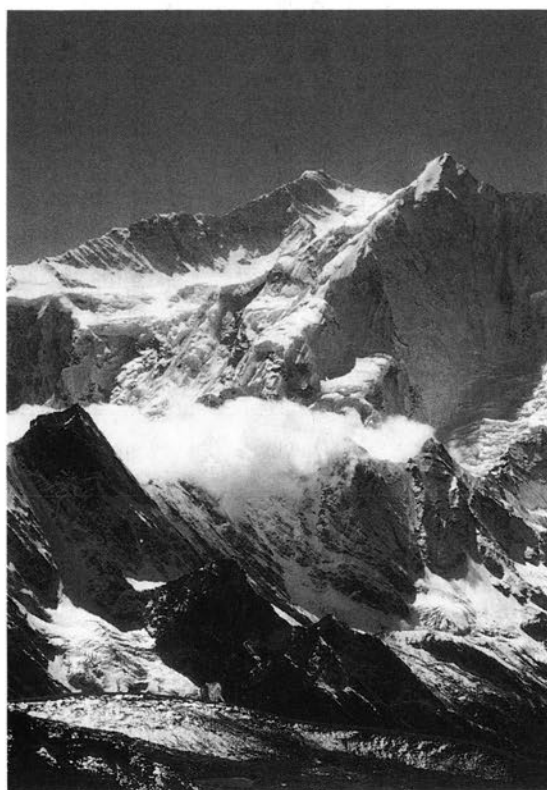




左奥のピークがマカルー峰 左へのびるスカイラインが東稜

日本山岳会創立九十周年を迎え マカルー峰東稜登山を計画

会長 藤平正夫

「日本山岳会マカルー登山隊一九九五」は、一九九五年三月初旬に日本を立ち、ポーラ・メソッドにより頂上を目指し、五月下旬に帰国の予定です。総隊長・藤平正夫、隊長・重廣恒夫、登攀隊長・山本宗彦で、登攀隊員十名、医師、マネージャー、通訳、気象担当各一名、計十四名で計画しています。当会の海外登山は、一九五二年から三度にわたるヒマラヤ遠征の結果、一

九五六年に世界第八位の高峰マナスルの初登頂に成功し、以後のわが国登山界発展の基礎を築きました。一九七〇年にはエベレスト、一九七六年にインドの最高峰ナンダデヴィの縦走、一九八四年は世界第三位の高峰カンチェンジュンガ縦走など、時代を先取りした新しい試みで、ヒマラヤ登山に数々の成果を上げてまいりました。

とくに中国においては、戦後初めて開放されたチベット側からの登山許可をいち早く取得し、一九八〇年、世界最高峰のチョモランマ北壁の初登攀を含む北面からの二ルートの同時登攀、一九八八年には日本・中国・ネパール三か国の友好登山として、チョモランマ交差縦走に成功しました。また一九九二年十月三十日には、世界最高の未踏峰ナムチャバルワ(七七八二メートル)の初登頂を成し遂げました。これ

本会は一九五五年に創立九十周年を迎えますが、その記念事業の一つとして、世界第五位の高峰マカルー峰(八四六三メートル)の未踏のチベット側からの登攀を計画しました。

九五六年に世界第八位の高峰マナスルの初登頂に成功し、以後のわが国登山界発展の基礎を築きました。一九七〇年にはエベレスト、一九七六年にインドの最高峰ナンダデヴィの縦走、一九八四年は世界第三位の高峰カンチェンジュンガ縦走など、時代を先取りした新しい試みで、ヒマラヤ登山に数々の成果を上げてまいりました。



1994 年(平成 6 年)
5 月号 (No. 588)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

マカルー峰東稜登山を計画……………	1
H・カパディア氏歓迎会……………	2
追悼・島田巽さんを偲ぶ……………	2
海外の山……………	3
東西南北	
織内会員中央アルプスに登る…	4
山の道具のマニュアル……………	5
俳句……………	5
私の海外の山々……………	6
新作ビデオ紹介……………	7
自然保護随想……………	6
JAC支部だより……………	8
北海道 岩手 宮城 福島 山梨	
信濃 富山 石川 福井	
図書紹介……………	12
『遠く高く』『秘境の山旅』『自然	
流スキー考』『越後山岳第9号』	
書籍・雑誌受入報告……………	13
報告	
第20回新入会員の集い……………	14
三水会現地集会……………	15
二火会懇親山行……………	15
山の自然学現地講座……………	16
インフォメーション……………	17
会務報告……………	18
ルーム日記/会員異動……………	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

は日中国交正常化二十周年の記念事業として行われた日中合同登山で、一九八〇年の登山許可申請から十年後の一九九〇年によりやく許可を取得し、偵察から三年の歳月をかけて登頂したものです。

さらに一九九三年の東海支部による皇冠峰の初登頂は、伝統と若い人たちの力の結集の賜でした。また年の瀬も押し寄せました十二月十八日には、「冬季初登攀」を目指した群馬岳連は卓抜したタクティクスで世界最高峰のサガルマタ南西壁からの登頂に成功しました。

このように、ヒマラヤの多くのルートが登り尽くされてしまった現在、新しい課題として複雑でより高度な登攀ルートが注目されています。これは「強靱な体力と技術」を持つ、総合的な高い能力が要求されるものです。その代表的なルートが、今回計画したマカルー峰の長大な未踏の東稜からの登頂であります。

マカルー峰東稜登山は、本会創立九十周年記念事業として会の総力をあげて取り組みたい、と考えております。長年にわたってヒマラヤ登山のご支援をいただいた会員の皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

なお、登山計画の詳細については、追ってお知らせいたします。

ヒマラヤン・クラブの H・カパディア氏歓迎会

海外連絡委員会

二月十五日(火)、午後六時半より本会会議室において、ヒマラヤン・クラブ(H・C)日本支部(大塚博美支部長)と共催で、日本ヒマラヤ協会(HAJ)の招きで来日中のヒマラヤン・ジャーナル(H・J)編集長、ハリジュ・カパディア氏を迎えて、歓迎会を開催した。

出席者は、H・Cの十五名(HAJの沖、八木原、尾形氏等を含む)を加え、約四十五名に達し、盛会であった。カパディア氏は、一九四五年にボンベイで生まれた四十八歳の第一線登山家で、H・Jの編集のかたわら、毎年インドの辺境の山に数多く出かけている。この中でも、アルパイン・クラブ(A・C)の会員でもあるカパディア氏が、自ら隊長として英印合同登山隊を組織し、一九八五年(シャチェン・リモII初登他)、一九九一年(チョン・クムダン)、一九九二年(パンチチュリ)の三次にわたり実施した英印合同登山が特筆されている。

また同氏の著書の中では岳友ソリ・メタ氏との共著によりヒマラヤン・クラブ五十周年記念誌として出版したExploring the Hidden Himalaya

(1990)が知られている。

*

今回は、一九九二年にクリス・ボニントン氏等と出かけたパンチチュリ登山のスライドを交えたレクチャーが行われたが、パンチチュリII峰から眺めたナンダコートの素晴らしい姿が印象に残った。

講演に引き続き行われた懇親会は、多年にわたる日印登山界の交流を背景にした、楽しい会であった。(Y・M)

追悼 島田巽さんを偲ぶ



織内信彦

また一人、古い会員が我々の前から姿を消した。島田巽(会員番号一二二七)さんである。会の理事、評議員や募金委員会ほか、数多くの委員を務められ、昭和五十四年に名誉会員、五十五年には在籍五十年の永年会員になっている。八十九歳で亡くなられたのは本年三月八日、入会が昭和五年だから、本会には実に六十四年在籍したことになる。日本山岳会にとっては生き字引

のような人であった。

慶応大学時代サッカー部で、選手やマネージャーとして活躍し、山岳部には入らなかったようだが、学生時代から山登りに親しんでいた。

昭和二年東邦電力に勤めた後、電力再編成を機に朝日新聞に転じられ、後年、戦後初のロンドン特派員を経て論説委員になった。この転職について島田さんから、人の一生の軌跡というか、わからないものだという話を聞いたことがある。

もしも島田さんが引き続き電力会社の社員でいたら、ジャーナリスト島田巽の世界は見られなかったかも知れないし、「マーシャル・プラン」「ふだん着の英国」や「今日のヨーロッパ」そして喜寿の記念に書かれた「遙かなりエヴェレストIIマロリー追想」などの名著も果たして世に出ていたかどうか。ジャーナリストであり、また何よりも自由人であった島田さんが何と、それから国家公務員になった。顕職であるが、法規や前例にがんじがらめに縛られる人事官。総裁の佐藤達夫(本会会員だった)氏を補佐する要職であった。島田さんと高級官僚、どう考えてもピンとこないのだが、島田さんは見事にその社会に溶け込んでいった。深く高い教養の上に重ねられた人間的な幅の広さによるものであり、鮮やかな

変身といってよいだろう。

ところで手元のメモを見ると、私には島田さんと山歩きを共にしたことが二十回ばかりある。そのうちの一つのニュージーランドからオーストラリアへ短期間の旅行をしたのが目を引く。

慶応登高会の長老小宮雅夫さん、本会の小原勝郎君（故人）と私の気のおけない四人の弥次喜多旅行で、真夏の数日を南半球の氷河に囲まれた山々や碧海を眺めながら楽しく過ごした。三人は申し合わせたようにノン・アルコールの下戸、こよなく酒を愛した島田さんは、いつも一人でやりながら、酒の分らないような野暮天とくるんじやなかった、と後悔されていたのではなかったろうか。

シドニーから空路日本へ帰るとすぐある雑誌に「昔のつかない歴史」という見出しでニュージーランドの風物や建国なお日浅いこの国の歴史にふれたエッセイを書いていた。記者育ちらしい早業で、私なんかは、まだそこはかなき旅の余韻から抜けきらないうちであった。

「温かい知性、山への愛をしみじみと」朝日新聞の素粒子欄に、論説委員であり、本会の会員でもある轡田隆史氏が書いていた先輩を想う右の一片を噛みしめながら、改めて故人の面影を偲んでいる。

海外の山

ヒマラヤの 焼却炉

江本嘉伸

ルクラは、クーンブ溪谷の玄関に位置する、人口八百人ほどの集落だ。ただし、この村の通過人口は、ネパールの他の村に較べて、断然多い。カトマンズからの飛行機が離着陸するからである。

この四月九日、村のはずれ、ナムチェバザール側の小高い地で、日本製の焼却炉が運転を開始した。

「予想以上に勢いよく燃えて、ほととしました」と、据え付けに立ち合ったHAT-J（日本ヒラヤン・アドベンチャー・トラスト、田部井淳子代表）の喜慶（ききん）の（し）政夫（あさひ）は、語る。

九二年、HAT-Jがサガルマータ山麓清掃トレッキングを行った際、ルクラの村長から「クーンブ地方の入り口なのに、皆通りすぎるばかりで、村のためになることをしてもらえない」とのアピールがあったのが、きっかけだった。

HAT-J側も、エベレスト街道からおろされるゴミを、できれば空

港のある地点で始末をしたい、と考えていたところだったので、決断は早かった。サガルマータ地域の環境保全を目的として活動している、SPCC (Sagarmatha Pollution Control Committee) を現地パートナーに、日本の地球環境基金の援助を受けて、ごみ焼却炉設置作戦が始まったわけである。

玄関口といっても、標高は二八〇〇メートル、酸素が希薄な場所だ。おまけに、登山隊やトレッカーが持ち込むプラスチック類のゴミが多い。燃焼効率を上げるために、炉を二室とし、高い煙突と、灯油を発電燃料とする電動式の送風機をメーカーに特注した。

ゴミも、燃えやすいゴミ、燃えにくいもの、有毒、金属、ガラス類、の五種類に分けて集積場を作った。趣旨をアピールする日、英、ネパール語のパンフレットを準備し、旅人や住民たちに協力を訴えた。

ネパールのHAT-J代表として宮原鶴が設置場所の整地、資材の受け入れに奔走し、山歩きで訪問中だった会員の佐藤伸一がトレッキングを切り上げ、炉の設置と、ゴミ焼却を任された現地スタッフの指導、助言を買って出た。

十数年前、「ゴミの道」と名付けられたエベレスト・ベースキャンプへのルートの浄化のために、ニュージーランドとオーストラリアの山岳会が「ゴミ入れ」を作り、効果をあげたことがある。（トニー・ハーゲン著「ネパール」町田靖治訳、白水社）

いま、ゴミは集めるだけでは、済まなくなった。その的確な処理のために、新しい技術が望まれている。

五月はじめ「煙と悪臭が出る」との情報、ネパールの新聞を通じて流され、HAT-Jメンバーを驚愕させた。カトマンズからルクラに飛んだ佐藤の報告では、実際に現地でそのような公害問題が起きている事実は目下のところなく、裏付けのない、推測だけの報道だったようだが、「ゴミ焼却炉施設」への近隣住民の理解は、考えてみれば、日本でもさまざまだ。

良いと思って実行したことでも、必ず、別な見方をする人たちがいるものだ。まして、暮らしの中で「ものを燃やす」ということへの感覚は、日本とネパールでは随分違うことだろう。

ヒマラヤの環境保護は、その住民に学ぶことから始まる。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



八十二歳・織内名誉会員 冬の中央アルプスに登る

南川金一

山の好きな人ならば誰しも、氷雪をまとった純白の山に憧れるであろうし、氷雪の山に青春をかけた人であれば、その思いは一人であろう。

名誉会員の織内信彦さんから、雪の



青春時代そのままの出で立ちで、足運びも確実

中央アルプスに登ってみたいとの話があったのは、一月の富士山麓の山に一緒に上ったおりであった。中央アルプスは、ロープウエーを使えば標高二六〇〇メートルの千畳敷までは問題なく行けるが、織内さんの気持ちには、アイゼン・ピッケルの領域に踏み込んで青春の山を回想してみたい、との思いが込められていることは十分に察することができた。

織内さんは一九一二年（明治四十五年）二月一日生まれの満八十二歳。ここ数年、元気に山登りを続けておられ、私も何回か一緒に登らせてもらったが、八十歳を過ぎた人とは思えない確かな足取りには敬服させられる。

とはいえ、積雪期の三〇〇メートル近い稜線に登るとあれば、それなりのサポート体制が要るので、日頃お付き合いをいただいている総務委員会のメンバーに声を掛けたところ、林栄二、中村昭、祝迫重明、中條昌子の各氏がすぐに応じてくれた。これに、織内さんのかつての職場の後輩に当たる春山政衛氏と私が加わり、六人のサポート体制となった。

時期は天候が安定し、なおかつ冬山の雰囲気味わえるであろう三月末とした。

ところが、今年は三月になってからの気温が低かったため、山は真冬の容相である。まだ雪の締まりが悪く、入山数日前に降った大雨も山では雪で、トレースを外すと腰までもぐる。アタック日の二十七日は晴天ながら、風が強く雪煙が舞い、日中でも千畳敷でマイナス八度Cという寒い日で、風が収まるのを待って、正午過ぎの出発となった。

さて、織内さんの装備であるが、戦後間もない頃に細野テントに注文して作ったという膝まである長いヤッケ、これも時代物の帆布のザック、帽子兼首巻きにもなるラクダの腹巻き、という青春時代そのままの出で立ちに、アイゼンは戦前の門田の鍛造八本爪、ピッケルは「山内東一郎一七九九」の銘

入りという逸品である。このピッケルは、一九四九年米國山岳会のオバーリン、アイレス両氏が本会に送ってきたG・ウィリッシュのピッケル（横有恒氏らが一九二五年のアルバータ初登時に頂上に残してきたものを、四八年に第二登した両氏が持ち帰り、AACの山岳博物館に納めた。それを模したものが本会に贈られ、現在もルームの談話室に展示されている）から型紙を採り、山内にオーダーしたという思い入れの深いものである。

下部の傾斜の緩いところはストックでバランスをとりながら、上部ではピッケルを使い、アイゼンを蹴り込んで一歩一歩確実な足運びで登り、二時間二十七分で二八六〇メートルの乗越浄土に着く。快晴の空の下、シュカブラを刻む雪面の向こうに宝剣の岩峰が頭を持ち上げ、東には南アルプスの連嶺が輝く素晴らしい展望である。

木曽駒の頂上を踏んでもらおうと、前進を促すサポートメンバーに、織内さんは、厳冬の山を十分に堪能することができたと、ここでの下山を宣言した。余力を残して下山に臨むという決断はさすがである。

千畳敷への高度差二〇〇メートルの下りの傾斜感は相当なもので、壮者でも経験の少ない者は膝が震えたり、腰が引けるところである。しかし織内さ

んは安定した姿勢が終始崩れず、念のためザイルをつけてもらったが、不安を感じさせる場面は全くないまま一時間ほどで下りきった。

近年改築されて立派になった「ホテル千畳敷」は我々山屋にとっては贅沢すぎるほどの快適さで、雪煙舞う稜線を、暖房のきいた室内から何度も見上げながら、雪山の余韻を楽しんだ。

アイゼン、ピッケルを使用している雪の急斜面の上り下り、我々にはそんなことが果たしてあと何年できるだろうか。せいぜい十年であろう。それが平均年齢五十代半ばのサポートメンバーの偽らざる心境だった。

俳句

三水会・高宕山集会にて

勝田房治

花咲くと人誘ひ来し九十九谷
苔まとひ春待つ顔の六地藏
九十九谷魁ふ富士さくら
木暗さの杉間に光る雪割草
木洩れ日に紅たしかなり藪柑子
きぶし咲く峠に淡し安房の海
犬ふぐり山波つづく上総安房

一九九四年三月

山の道具のマニュアル

山本健一郎

年を追うごとに、新しい山の道具が売り出され、便利になって、小生も恩恵を受けている。その輸入量も経済大国日本のこと、加えて近年の中高年の登山ブームもあって、馬鹿にならない水準に達しているものと思われる。しかし、マーケットの大きさに比べて、日本の登山用品の輸入国としての地位は、あまり高くないように思うのは私だけではあるまい。

実は先日N社の山スキー用の靴を買ってしまった。スキーが一向に上達しないのに、何年かに一度気分を変えするために浮気をする悪い癖が出たためである。この靴にはメーカーが作ったらしい六カ国語で書かれた説明書がついていて、日本語の説明もちゃんと印刷されている。もう何年か前なら、印刷された説明書に本文を見ることができなく、良心的な輸入元が別刷りの簡単なメモのコピーをくれたりする程度だった。それで正規の説明書に、本文も堂々と印刷されているのは大変な進歩ではないかと感激した。

しかし、この本文の説明書は読んでみると相当にひどいもので、メーカーのほうはいかにもお座なりに日本人

をつけただけ。文章の正確さなどチェックしないらしいし、輸入元もこの程度のものですらチェックする能力がないらしい。

この説明書のオリジナルは多分イタリア語で書かれたものと思うが、イタリア語に弱いので英文と日本語と対比してみよう。例えば英文では、*wash dirty ski boots only with a sponge and cold water, avoiding any type of detergent* : となつてゐるから、

「汚れた靴はスポンジと冷水だけで洗い、洗剤はどのようなタイプのもので使わないでください」としか読めない。ところが対応する日本語は「汚れたスキーブーツは、スポンジに中性洗剤を含ませ、汚れを落とし水で洗い流してください」となっていて、逆に洗剤を使えとすすめている。洗剤を使って品質が劣化したら輸入元は交換にに応じてくれるのか。面白いから一度照会してみようかと思つてゐる。また本文の「アップパーバックルには微調整システムが装備され、MICROFLEXバックルにはリリース防止ブロックBがついています」というくだりも、何のことか分からないので英文を参照すると「三つのバックルのすべてに微調整装置がついており、加えて一番上のバックルには外れ止め金具Bがついていて」という意味のことが書かれていて

よく分かった。本文のほうで突然飛び出すMICROFLEXという言葉は、他の五カ国語の説明文中には見当たらず、どうしてこんな言葉が出てくるのか理解できない。説明書は商品の一部であり、製品と同じように完全なものではないと、山の道具の場合には誤使用によって事故を招きかねないと思うのだが、今もってこんなにひどいものがまかり通っているのは残念である。

これに引き換え、ライカやハッセルブラードなど輸入カメラの日本語のマニュアルは非常によいで、誤訳など見つかりそうになく感心させられる。こんな説明書がまかり通っているのは、我々ユーザーの責任でもあるが、輸入業者も売りさえすればよいという姿勢を捨てて、円高差益で潤っているのだから、説明書にもコストをかけ、商品にも英語に強い人に訳出してもらうぐらいのことはしてよいのではなからうか。あるいは、輸入業者として、メーカーに対し、日本のマーケットを軽視しては困る、製品だけでなく説明書についても完全を期してほしい、とクレームをつけるぐらいの見識を持つてもらいたいものである。

そうなれば、プラスチック製の登山靴やスキー靴の耐用年数についての理解不足による騒ぎなども起きなくなるのではなからうか。

私の海外の山々 深田さん、槇さんのことなど

太田新生

深田久弥著の「雲の上の道」に「ラ
ンタイン・ヒマールの氷雪の峰々がい
っせいに私たちを迎えた。それはまる
で不意打ちのように私たちを驚かせ
た」という文章がある。一九五八年六
月三日のことだった。「誰にも劣らな
いヒマラヤへの一心」を抱き続けた同
氏に当然の感激であった。だが、それ
までが大変だった。外務省、大蔵省な
どからなる渡航審議会の外貨割当を獲
得しなければならなかった。槇さんか
ら「お役所へはお百度を踏まなけれ
ばなりませんよ」と念を押され、実際
「私にとって霞ヶ関の官署街がわが町
のように明るくなった」。そして、そ
の頃の外務省での窓口が私であった。
おかげで私は多くの山の先輩にお会い
することができた。「マナスル報告書」
を久しぶりに手にしてみると、扉に、
槇、三田、小原、村木、松田などの諸
氏のサインが連ねられていて懐かしい。
マナスル初登頂は一九五六年五月のこ
とである。

ところで私自身の「海外の山」はい
ささかわびしい。初任地はわずか一年
あまりのニューデリーであったが、そ

の間、一九五三年五月にエヴェレスト
の初登頂があり、私はポーターを伴な
ってナンダ・デヴィを間近に望むトレ
ッキングを試みた。往復十日ばかりを
要した。立派なピンダリ氷河を挟んで、
左にはナンダ・デヴィ（七八一六メー
トル）の秀麗な双峰、右にはナンダ・
コット（六八六七メートル）を一望の
下に独り占めしたときは、思わず独り
歓声をあげた。ナンダ・コットは見栄
えはしないが、戦前の一九三六年、日
本最初のヒマラヤ登頂に挑んだ堀田弥
一・立教大学チームの壮事を讃える気
持ちで一杯だった。その頂上は右手の
尾根伝いに、私でも行けそうな錯覚を
起こさせるほど近かった。一九五三年
の夏だった。

その後の任地は、ほとんど山に縁の
ないところばかりであった。シンガポ
ールでは三田さんに教えていただいて
マレーシアのゴム園の奥の一三〇〇メ
ートルくらいの山に「遠征」して、そ
のことを報告したら、雑誌「アルプ」
に転載してくださった。

人類が最初に月面に立ったときはヒ
ューストンにいた。アポロ計画の基地
であったが、テキサスに山はなかった。
あるとき口実を設けてシアトルに飛び、
あわよくばマウント・レニエ（四三九
二メートル）を、と登山口まで行った
が、一人ではガイド料が高いうえに強

自然保護随想 環境ビジネス への期待

関塚貞亨

「山」二月号の自然保護随想、小倉
厚氏が書かれた「企業も環境問題に真
剣に取り組んでいる」という趣旨の随
想に対して、四月号の東西南北欄に、
笠井篤氏から「過去の悪行の免罪符に
はならない」との痛烈なご意見が寄せ
られた。笠井氏に反対するわけではな
いが、企業の環境ビジネスに期待する
面を述べてみたい。

まず身近な問題として、クーラー、
冷蔵庫などに使われているフロンガス
の無害化、また現在使用が禁止され、
保管が義務付けられているPCBにつ
いて、無害化技術が開発された、との
ニュースが伝えられているが、この技
術を実用化し、世界的規模で経済的に
実施できる設備を整備する事業は大企
業に期待する以外にはない。安価な代
替ガスの開発と生産も大企業以外には
不可能であろうし、保管中のPCBの
無害化も同じことであろう。

また、近い将来の問題として、化石
燃料が枯渇したとき、火力発電でまか
なってきた電力を原子力発電に置きか

えるのは、大量に発生する廃棄物の処
理が問題となろう。火力にかわる原子
力発電所を建設するより、あらゆる電
気製品の省エネ技術を飛躍的に向上さ
せ、この省エネ製品を大量に生産して、
安く提供し、普及を図ることができ
るのは大企業の力である。

さらに太陽電池の発電効率をいっそ
う向上させる研究、安価で軽い蓄電池
の開発など、太陽発電、風力発電によ
る個人発電が、経済的にも容易にでき
るような技術と製品化は、大企業の協
力がなければ実現しない。その意味で
企業による環境ビジネスへの期待は大
きいといわざるをえない。

三十年前、テレビの電力消費量は三
百ワットであった。いま倍の大きさの
テレビの消費量は、その半分である。
冷蔵庫も同じで、省エネ技術は目に見
えないところで進んでいる。

これをさらに半分にするのを、夢物
語とは考えられない。かつて五十万円
以上だった電卓式卓上計算機を、五年
の間にカードの大きさまでに小型化し、
千円以下の価格まで引き下げた日本企
業のすさまじいエネルギーが、環境ビ
ジネスで発揮されないわけではない。

以上、個人的な意見だが、環境学者
がなしえないことを、企業は実現する
能力がある。期待したい。

行すぎて、自信が持てなかった。

オランダでは昭和天皇兩陛下をお迎えしたが、海面より低い国土を持つオランダには山がない。マイカーや鉄道で何回かアルプスに向き、ツェルマツト、サンモリッツ、シャモニー、ミューレン、ザースフェーなどのペンションに泊まって、雪渓を踏むトレックをした。

その次の、そして最後の任地が一九七四年から七七年までのリビアであった。地中海から一〇〇キロも入れば砂漠であるうえに、難しい独裁者が君臨する国であったが、日本赤軍のハイジャック機を受け入れてくれた。

山に飢えてミラノに飛び、ウィンバリーを偲びつつ、マッターホルンのイタリア側の麓ブルーイユに泊まり、三〇〇メートル余のテオドル峠まで、長い雪面を往復したこともある。しかし、砂漠に点在する丘に上がって茫洋たる風景を望むと、不思議な魅力がわく。

あるとき京大の文化人類学の谷泰さん(JAC)が来られて、そんな岩山にお誘いしたことがある。その縁で、イタリアのペテラン岳人に紹介していただき、アペニン山脈の町を訪れ、彼の友人兼ガイドに連れられてアペニン山脈グランザッソーの最高峰(二九一二メートル)に登った。七五年十一月、ザイル、ピッケル、アイゼンの我々二

人だけの厳肅な初冬の山頂であった。

こうして私の「海外の山」は終わった。再び故国の山に親しむようになったが、今は深田さんも横さんも三田さんもいない。三年前、金沢の旧四高跡文学館で、深田さんが茅ヶ岳で最後まで手にしていた杖を見た。山村正光さんから当時の話を何度か聞きながら、未だにこの手近な山にも登ったことがない。「お役所通い」がお嫌いであつたであろう深田さんに「お百度を踏まねばなりませんよ」といたずらっぽく声をかける横さんの端正なスマイルを想像しながら、今年こそは、今年こそはと思ひながら、一年また一年が過ぎてゆくのである。

新作ビデオ紹介 「早稲田の山」

羽田栄治

創立七十有年の伝統を誇る早稲田大学山岳部では、部の足跡を映像で残そうという計画が数年前から持ち上がり、ついに今年初め、ビデオ版「早稲田の山」が完成した。

製作に当たったのはOBでつくる稲門山岳会の仲間ら。足掛け二年にわたる膨大な映像資料を収集、ビデオはそれらの中から八十五分にまとめたもの。

早大山岳部の創立は大正九年、当時日本の近代登山はほぼ根を下ろし、学生らは競って日本アルプスを中心に活発な登山活動を行っていた時代である。ビデオの冒頭は、山岳部に在籍していた仲間たちの新春の集いから始まる。彼らこそ山岳部のそれぞれの時代を背負っていた証人である。

創部十九年目の昭和十三年、当時日本では新高山と呼んでいた台湾の玉山への遠征登山のシーンが蘇る。

戦前、「対米宣戦布告」「学徒出陣」など、また戦時下の部活動、そして終戦。焦土と化した東京など当時の「二

ユース映画」を挿入しながら時代背景を描く。貴重な映像である。

戦後間もない頃、早くも「ペテガリ岳」遠征、続いて極地法による厳冬の穂高・北尾根登山など、また昭和十八年、戦後早大山岳部初の海外遠征となった南米最高峰「アコンカグア」を描く。さらに三十一年「マナスル」、三十四年「ヒマルチュリ」などでは多数のOBが活躍する。

そして「キリマンジャロ」「マッキンリー」「アルパマヨ」と続き、昭和四十年には初のヒマラヤ遠征「ローツエシャル」、それは不運な事故を生むドラマチックな登山だった。しかし脈々と続く夢の結実に五十六年の「K2西稜」初登攀。それは先輩後輩で結ばれた強い絆の成果であった。

平成三年の「トリポール」山行で映像は終わるが、ナレーションは「一人は全員のために、全員は一人のために……早稲田の山仲間」に受け継がれてきたこの炎を消してはならない」と締めくくっている。

またこのビデオは日本の登山史の側面であり、登山用具の変遷史でもある。映像の持つ記録性をまざまざと見せつけられた作品である。

(ビデオは日本山岳会に寄贈していただきました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます)



ビデオ「早稲田の山」は早大山岳部 75 年の映像記録であり、登山史、登山用具の変遷史にもなっている。



JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

北海道支部 自然観察ハイクも計画中

昨年は支部の二十五周年記念山行を日高のイドンナップ岳で約七十名が参加して行い、秋には観月山行を道南の南白水岳で行った。忘年会は本部の晩餐会にならない、毎年十二月の第二土曜日と決めて行っており、約六十名で賑やかに催した。

年が明けて二月には、会員のニセコ望羊荘でスキー山行。この他個人山行ではあるが、ヒマラヤ・トレッキングに二パーティー、本州の山へスキー、山行にも出かけている。中高年の会員が多いが、最近若い人も加わって、年々わずかず参加人数も増えている。新年度は新たに自然観察ハイキングを加え、さらに春夏秋冬一回ずつ天塩岳、

武利岳、ピセナイ山、冬の十勝岳周辺と計画している。

深雪のニセコアンヌプリ

二月十一日、アンヌプリ中腹と好立地のロッジ望羊荘に札幌、小樽、函館から集合。夕食は明日の天気を祈るお天気祭り。盛りだくさんの料理に、持ち込まれた銘酒、ワインなどがところ狭しと並ぶ。わが会員の望羊荘オーナー・船場俊己さんからは珍しい鹿肉の刺身が差し入れ。飲むほどに語るほどに一同盛り上がり、野田支部長の古楽器の演奏、石井忠雄会員の魅惑の歌声、即席四重唱と楽しき尽きぬひと時に夜が過ぎるのを忘れる。

翌十二日、最終リフトからシールで二十分、強風の頂上（一三〇九メートル）に立つ。ゲレンデ組は粉雪を蹴って縦横に伸びるひらふコースを目がけ舞い降りる。山スキー組は反対の北斜面を行く。シールを外しスキーを踵に固定。慎重に方向を定める。斜面に直角に二本の板を揃え、大きく前方にストックを突き出し、飛ぶ。だれ一人いない処女雪に六人のシュプールが描かれる。二十分ほどの快走。

雪に埋もれた道を進み、道路閉鎖にもかかわらず営業中の五色温泉ニセコ山の家に着く。早速露天風呂だ。熱い。周囲に二メートルほどそり立っている雪を崩し、お湯に入れる。ついには



深雪のニセコアンヌプリの頂上で（北海道支部）

裸で雪壁を登攀、「手がアイスバイルだ！ 足がアイゼンだ！」肌から湯気がもうもうと上がる。気がつくともちよいどいい温度。肩まで浸かる。汗を流してこそその極楽だ。

露天風呂の狂騒と無縁なキリリとした山男・女の顔に返り、再度スキーを履き、電柱沿いを迷うことなくトラバース。見返り坂を越え、ダケカンバの林を滑走、アンヌプリスキー場を経由、望羊荘に全員無事帰着。本数の多さを競ったゲレンデ組と合流し乾杯。

十三日、わずかな日数に多くの思い出を重ね、再会を約し、帰途についた。参加者二十三名。（真下誠二）

岩手支部

秋の例会は毎年茸づくし

いつの頃からか、秋の例会は岩泉町の安家が常宿になっている。というのも、宴会ばかりか朝餉や弁当に至るまで、茸づくしの大歓迎なのだ。昨秋は山も不作で、危うく口にいかねるところだったが、地元町役場に勤務する山崎幹事のたつての頼みで、女将が方方からかき集めてくれた。感謝感激。

女将のほうも大のJACファン。春にはワラビやボウナを手折りながら、会員たちと新緑の山路を楽しんだものだ。酸素濃度日本一を誇る岩泉の盆地に入ると、町の北側に石灰岩をなで切りにしたような岩壁がそそり立っている。十月の山行には、この宇霊羅山を目指して西方の音床山から縦走した。

途中で地元の茸採りの一行とすれ違ったが、茸は我らの目にはなかなか止まらない。かわりに熊の糞ばかりがやたらと多く、全部で二十何個と数えた「博物学者会員」もいた。天候に恵まれ遠く山座を同定し、足下に竜泉洞のゲストハウスを見下ろし、松茸ご飯の弁当に形相を崩して一息。

二月の青年登山懇談会には、岩手医大山岳部の現役部員二名が参加した。若手同士の懇談を期待していたらしい彼らは、中高年ばかりの会場に入るな

り、初めは拍子抜けの体だったが、第一級クライマーのパネルディスカッションや講演に大いに刺激されたようだ。従来の支部山行は、主に北上山地を舞台としてきたが、一連の記録を編集した「続・かめか平の山々」を昨年四月に刊行し、これを一区切りとして奥羽山系も取り入れ、今夏の例会には、さらに穂高まで足をのぼす予定。時間が許せば、地方会員にとっては馴染みの薄い「山研」を利用する格好のチャンスにもなる。

秋には、また安家。周辺の山々は、ほぼ登り尽くした感があるが、この宿からは当分離られそうにない。

(松田和弘)

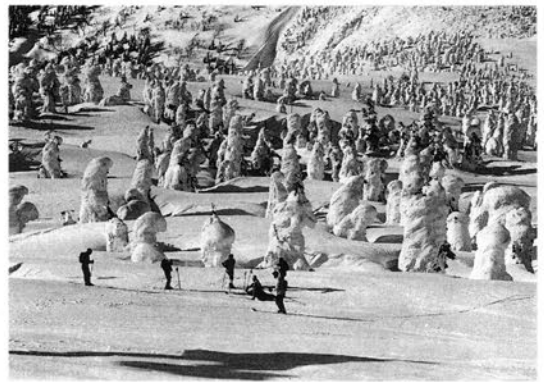
宮城支部

二十数年続く

元旦の泉ヶ岳登山

平成五年宮城支部晩餐会

今年度の支部晩餐会は、昨年十二月七日ホテルリッチ仙台にて、午後六時より開催した。木皿謙会員の司会により柴崎徹副支部長の挨拶、伊達篤郎元支部長の乾杯で、和やかに始められた。本年の支部新入会員・太田正、長谷川章の二名が紹介され、新たに仲間入りした。その後、三宅泰会員が仙台近郊にある「オボコンベ」という珍しい名



厳冬の宮城蔵王・刈田峠の樹氷林で (宮城支部)

前の山の由来について、アイヌ語の「オボコンベ」(尖った山)が定説だが、また違った視点から見た由来の新説を面白く語った。出席者二十七名。

泉ヶ岳元旦登山

支部恒例の行事となっている。今年は何回目になるのかと考えてみた。十数年前に飯野信会員から連続十年と聞いているが、私が参加してからも二十回以上続いている。今年のは今一つ、参加者も五名と寂しかったが、途切れることなく登ることができた。

厳冬期登山会

一月二十二、二十三日 宮城蔵王刈田岳 五名参加

冬山登山会

二月二十六日 宮城蔵王不忘岳 二名参加

スキー山行

三月十二、十三日 山形蔵王スキー場 十一名参加

以上で今年度の行事は無事終了。平成六年度の行事予定は未定だが、東北地区集会在九月十、十一日に宮城県大和町「セツ森」で開催の予定になっている。詳細は別にご案内するが、ぜひご参加ください。

(千石信夫)

福島支部

スキー登山を楽しむ

新年会

二月十九日、福島市内「はりまや」に三十余名が参集、近況や山行抱負を語りあう。また、年度内に残されたスキー登山についても話し合い、新年にふさわしい歓談の集いになった。

安達太良山スキーツアー

二月二十七日、十名参加。あだたら高原スキー場のゴンドラを利用して、一気に薬師岳の一角に到達する。二時間近くシルシル登高。強風のなか、山頂基部に達し、スキーをデポして山頂に立った。雪と氷に包まれた船明神山の岩稜、その奥の磐梯山の雄大な景観を楽しむ。鳥川源頭部から、五葉松平に

かけてのカラス谷は粉雪に埋もれ、快適な滑走を楽しみ、スキー場でビールで乾杯の後、解散する。

西吾妻山スキーツアー

三月二十七日、他支部員二名を迎え、総勢二十六名。昨シーズンにオープンしたグラン・デコススキー場のゴンドラとクワットを乗り継ぎ、スキー場最高地点に到達する。行事企画担当の大谷司を中心にミーティングを行う。

西大嶺山頂を目指し、樹氷群の間を縫って登高する。かつて、小野川湖畔から五時間を要した登行も、ゲレンデの機動力をフル利用で、短時間に全員登頂できた。西吾妻小屋で昼食。吾妻山群中の最高峰西吾妻山頂では、樹氷原のみなに望む裏磐梯の大観を期待していたが、濃いガスに遮られていた。二十日平経由の長い林間滑降の後、スキー場へ下山する。若きは二十代、上は七十代。年齢を越えた和気あいあいの楽しい山スキーであった。

平成六年度も、百二十名の支部員が積極的に参加でき、楽しめる活動の場を設定していきたい。(西関良光)

山梨支部

全国支部大会が 強力なカンフル剤に

昨秋は、全国支部大会の開催という

重責を、日本山岳会本部の方々の協力と、全国各支部の参加により、何とか無事果たし終えることができました。改めて、お礼申し上げます。

停滞気味の山梨支部にとりまして、今後の支部活動を考えるうえで強力なカンフル剤になったように思われます。

十一月十八日に、全国支部大会に参加した支部員により、反省会と打ち上げ会を行い、同大会の区切りとしました。そんなことが刺激になったのか、本部の年次晩餐会には、山梨支部から十一人という参加者がありました。

本年は一月二十二日に恒例の新年会を行い、本部からも小倉常務理事の参加をいただき、大盛会でした。

今年度前期の予定につきましては、以下のようになっています。

四月十五日 山梨支部通常総会
四月十七日 深田祭

五月二十八、二十九日 木暮碑前祭
七月下旬 納涼会・支部山行

今年度は、役員改選期に当たります。支部長以下新しい顔ぶれで、いっそうの活性化を進めたいと考えています。

深田祭は、茅ヶ岳で急逝された深田久弥氏を偲ぶ会として韮崎市が主催し、当支部も協賛する行事です。

木暮碑前祭につきましては、四月の会報「山」に案内のあるとおりです。三年前より、支部行事として行うよう

になりました。支部としての山行も今後の課題です。登山経験の少ない高齢会員問題も含めて、検討していきたいと考えています。
(遠藤靖彦)

信濃支部

秋のひょうたん池

信濃支部の山行は、夏山に始まり秋山、スキー例会、春山の四回である。山行の中でも秋山は、例会委員によって、できるだけ大勢の会員が参加できるように計画を立てる。前夜は温泉に入って、翌日目的の山へ登るのが恒例である。

今年の秋山山行は、新装なった上高地山研に宿泊して、山研の一夜を楽しみ、ひょうたん池に行くことに決定した。参加者多数のため平日にしか部屋



秋山山行は上高地のひょうたん池 山研の前の記念撮影(信濃支部)

が取れず、平成五年九月二十二日に実施することになった。

思い思いの方法で夕方六時の懇親会に間に合うように上高地に入った。赤羽支部長はじめ大勢が集まり、例会委員の北林会員の司会で懇親会が始まる。

調理師である会員の料理と管理人の島田さんの温かいもてなしに、一同大満足である。終宴の頃、カトマンズ市への水害見舞い金を帽子をまわしてカンパした。部屋に入りきれない者は、シュラフで展示室へと散っていった。

翌朝は、小雨模様の中をひょうたん池組と上高地散策組に分かれて出発する。ひょうたん池組は休憩後、わずかの出発時間の違いで、女性の多い班と男性の多い班とがはぐれてしまった。男性班は宮川尾根をトラバースするのを間違え、明神岳最南峰の岩壁の基部に迷い込んでしまい、笑いでごまかした雨の下宮川谷の往復であった。

一方女性班は予定の時刻に目的地、霧雨に煙るひょうたん池に到着し、美しい

素晴らしい自然を満喫した山行であった。散策組も改めて上高地のよさを見直すことができた。

来年二月のスキー例会の再開を約して解散した。参

加者二十三名。
(塚原賢勝)

富山支部

播磨頭彰碑の環境整備を予定

昨秋からの富山支部の活動状況を簡単に報告します。

*上高地「さんけん」研修山行(五年九月二十五、二十六日)

新装オープンした「さんけん」を訪ね、秋色深まる上高地を散策するという、山には登らない山行。二日間とも好天に恵まれ、乗鞍スカイラインにも足をのびし、遠足気分を楽しみ日々であった。

*藤平正夫会長、環境庁長官表彰受賞記念祝賀会(十一月四日)

*若林啓之助前支部長、勲五等双光旭日章叙勲および北日本新聞文化功労賞受賞祝賀会(十二月九日)

両祝賀会とも富山県、報道機関、県内山岳界有志一同により、盛大に行う。

*播磨頭(六年五月下旬)

昨年は播磨頭彰碑建立十周年で、記念行事も無事終了したが、今年は前から意見が出されていた頭彰碑後方の湧水処理として、当支部会員浜田石苑の協力を得て、旧河内村の方と当支部により、環境整備に取り

組む予定である。

(有沢辰彦)

石川支部

支部としての活動より 個人山行が主流

昨年の後半は、新装成った上高地のさんけんの改築記念集會を八月二十七、二十八日に実施した。さんけんに一泊の後、中尾峠より焼岳を往復し、中尾へ下山した。

秋季登山は雨飾山を企画したものの悪天候のため中止となり、十一月は支部恒例の「山祭り」を一里野高原にて実施。晩秋の山を見ながらの深夜までの山談義は盛會であつた。



8月の山研記念集會で「さんけん」に一泊 (石川支部)

福井支部

海外の山や 近隣支部との交流登山も

福井支部の山行計画は、①福井県内の山を隔月ごとに登る ②日本山岳會選定の三〇〇山を隔月ごとに登る ③海外の山を毎年一か所登る ④近隣の支部と交流登山をする、の五つを骨子としている。

平成五年度は六月六日、「環境の日」

当支部も若年層の新會員は望めず、會としての例会山行は前述のごとくである。ほかには個人山行が主流化しており、年間五十座完登目標の會員もいれば、北は利尻、大雪から、南は屋久島までと精力的に動く會員もいる。それが支部全体の行事につながると考えているが、ただ今後、高齢化時代、遭難対策と山積する問題があるのはいふにおよばずである。

今年は五月に笈ヶ岳、六月大門山、九月は奈良岳と近隣の山を中心に計画しており、山研集會も実施する予定である。

また、平成八年には石川支部も設立五十周年を迎えるので、記念行事を企画中であり、その中でいっそう會員の和を図りたいと考えている。

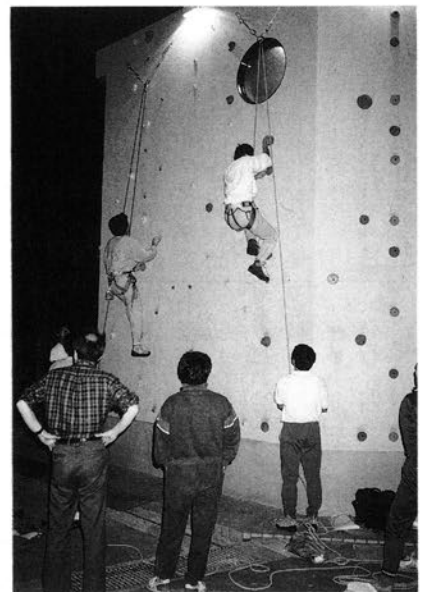
(樽矢導章)

に荒島岳に登り、清掃作業をした。参加者は支部長他七名。六月十二、十三日は富山支部四十五周年記念事業で式典および「中山」

山行に支部長他十名が参加し、北陸三県の親睦に役立った。

七月二十五、二十六日は三百名山の針の木岳、蓮華岳に宮本他三名、また八月十四、十七日に鷺羽岳、三又蓮華岳、黒部五郎岳、薬師岳に宮本他二名が登山。十月三日、県内の金草岳に宮本他六名が参加し、秋の山を満喫した。大峰山には関西在住の竹會員のお世話により、十一月十三、十四日に登頂し、福井支部からは八名が参加。久しぶりの電車山行で、楽しい一時を過ごした。

新年会は荒島岳山麓の銀嶺荘で二月十九日、十名の参加者で夜半すぎまで山の話に打ち興じた。二十日は当日の参加者とともに荒島岳に全員登頂し、山スキー班は頂上から橋掛谷を滑降し、久しぶりにその醍醐味に酔い知れた。



宮本宅の二階一部を支部の例会場に行っているが、その外壁にフリークライミングのボードを取り付け、例会時にはクライミングを楽しんでいる。

ワカン班は登頂ルートを下山し、全員無事銀嶺荘に帰り着いた。

県外の山スキーに三月十九日、富山の白鳥山、二十日に新潟県の笹倉温泉から焼山に、宮本、山田、山縣、森忠、力石他二名が参加したが、雪質が悪く悪戦苦闘する。

海外登山には十月三日から十二日まで岐阜支部の藤井會員、石川支部の太田會員など十名と共に台湾の中央尖山の山行に宮本が参加し登頂。台湾の人たちとの交流に非常に感銘を受け、有意義であった。

なお、十二月二十九日から一月五日までマレーシアのキナバル山に宮本、太田が静岡支部や他の人たち十二名と共に登頂、正月一日のご来迎に全員で喜びを分かち合った。

(宮本数男)

図書紹介



大西 宏遺稿集

『遠く高く』

一九九一年秋、ナムチャバルワで雪崩により死去した大西宏の遺稿集。

私も隊員として行動を共にしていた。常に先頭を切る強靱な体力、旺盛な意欲に驚嘆。明朗、快活、何ごとに対しても精一杯の誠意で対処。妥協を許さぬ信念に、ナムチャの後の南極もきつと成し遂げるものと信じていた。

ヒマラヤ、アンデス、極北と数々の修羅場を渡り歩きつづけた彼は文学部出身。「明大時代からの高くて広大無辺なものに憧れてきた自分を書く」本の原稿を書き進めていた。

ご家族の影響で幼少の頃より文章に親しみ、明大では名文家で鳴らしたと聞く。要所要所には岳友の的を得た解説、彼についての座談会や追悼文も納め、六二〇ページもの大部の労作。

惜しむらくは南極をも含めた「遠く高く」の本として読みたかった。一読を勧めたい。

一九九三年十一月 悠々社発行 A
5判 六二二ページ 六、五〇〇円

(高見和成)

大内尚樹編

『秘境の山旅』

本書を構成するのは山十七編、峠と沢各一編の十九編。登場する山で日本山岳会選の三百名山に含まれるのは縦走を入れて皇海山ほか八座に過ぎず、多くは日高、増毛、白神、海谷といったローカルな山地の山々であり、台高山地の沢、屋久島、西表島の山は関心をひく。

編者は秘境の山を、安易に登れず、それなりに労苦を伴う山と定義づけ、登山道がないこと、日帰りは無理という二つの条件を付している。しかし十五人の執筆者のとらえ方はもう少し幅が広いようで、それがかえって内容を多彩にしている面白。

一部執筆者の秘境公開への危惧に対し、編者は「原始の世界に浸る喜びをより多くの人々に伝え、その体験を元とした秘境の保護の輪を広げることが大切であり急務ではないか」と述べているが、議論の余地はあろう。ともあ

れ登山の原点であるアドベンチャー精神に根ざした好著といえよう。

一九九三年十二月 白山書房発行
二四六ページ 一、八〇〇円

(山田哲郎)

渡辺兵力著

『自然流スキー考』

本書はスキー技術、テクニクを示すイラスト、写真などは一切なく、ただひたすら文章で説明されている。といっても、読み手が頭の中で理解し、イメージし、それを今度は運動として体に覚えさせようとするためである。

で、本題も「技術」書とは敢えてせず、「考」としたことがここに現れていると思う。

これを読むとスキーとはむずかしいものでなく、歩くことの延長線上であることがよく分かる。そして、これが楽で安定した滑りにつながることも分かる。

実際最近になって、これに近い動作を実践してみると、一日中ゲレンデで滑っていても全然疲れない。スキーとは板で滑るものでなく靴で滑るというのも実感した。スキーを愛し、長く楽しみたい方はぜひ一読を。

一九九三年二月 茗溪堂発行 一三〇ページ 一、六〇〇円 (山崎浩子)

日本山岳会越後支部編

『越後山岳 第9号』

本書の輪郭は平成五年会報十二月号の支部だより佐藤支部長が書いておられるので、重複を極力避けるために同記事を参照願いたい。

本書は遺稿として特別寄稿を除くと会員二十三人による二十六編よりなり、同支部の執筆陣の厚さが窺える。

全編を通じ地域に根ざしたものが多く、八十里越の歴史と沿革に紀行を交えた二編をはじめ、「越後の山川名考」「越後の飯豊山信仰」のように民俗的なサイドからの研究。越後の高山植物二百八十二種の生育地域・場所を一覧表にまとめた一編。さらには「深田久弥と頸城山塊」、「西脇国三郎の秋山紀行」のように人物と越後の山とのかわりを論じたものなどである。

山では著名連峰の八つの登山コースを紹介した一編と、刈羽黒姫山、樋曾山、櫛形山脈など、一般になじみの薄い越佐の山々の紀行に、遊び心を誘われる。

以上全体の半数にも満たないものにはしか触れられなかったが、多彩な内容を擁した一冊である。

平成五年四月 日本山岳会越後支部発行 四一三ページ 三、〇〇〇円

(山田哲郎)

Edited by Johanna Merz

The ALPINE JOURNAL 1993

英国山岳会隊が地球上の最高地点に初めて登り着いたのが一九五三年。あの興奮に満ちたエベレスト初登頂から満四十年が経過した。これを記念する『アルパイン・ジャーナル一九九三年度版』は大層豊かな内容で、例年よりも多い写真、絵画、地図を含み、通例の会報の域を越えている。初登頂に至る助走時代の懐古を加えると、エベレスト関係の記述が全巻の四分の一を占める。エベレストの初登頂が英国山岳会の誇りとして、今なお新鮮に記憶され続けている。英国山岳会の旧世代から新世代に向けてメッセージを送るかのようでもあって、この部分だけでも十分に読み甲斐がある。

もちろん一九九一年から一九九二年にかけての最新の活動の記録も多彩である。ボニントン隊によるパンチ・チュリ周辺の登行、グレグソンによるグリーンランド紀行など、高峰から雪原まで報告者たちの活動場所も広い。本書には日本アルプス登行記まであって、窮屈な小屋でザコ寝させられて、一泊二食付き七、〇〇〇円の高さに驚きながらも、上高地の美しさを讃えているのが微笑ましい(一七三―一七五ページ)。

ージ)。

新刊書紹介、物故会員の訃報の念入りさもあることながら、いつもながら巻末の索引に私は感心する。索引を見渡して内容の豊かさを想像することの楽しさを味わわせてくれる。エベレスト初登頂四十年記念にしてこの出来栄であるのだから、第百号となる一九九五年版はどれほどのものになるのやら。二年先を今から想像したくなる。

THE ERNEST PRESS in association with THE ALPINE CLUB, LONDON (宮下啓三)

Berg '94

Alpenvereinsjahrbuch

ドイツ山岳会、オーストリア山岳会および南チロル山岳会の『年報』は今年で一八八号を迎えた。恒例の付録地図と巻頭案内はレヒターラー・アルベ(昨年はダハシュタイン)。第一級の登山家・有識者のエッセイ、紀行、報告、論考など三十二編のテーマは多岐にわたり、百年を越える伝統と新しい動きへの柔軟な目配りが渾然として、実に楽しい本である。内容は登山一般、外国、遠征、自然、環境、芸術、文化、歴史に大きく分かれ、美麗なカラー写真や貴重な歴史的写真がふんだんに使われている。マウンテンバイクを駆使した若者の元気のいい紀行、高所医学

から見たフェミニズム的論考、当時の愉快な漫画を紹介してのミュンヘン学士山岳会百年の歴史(前会長メルツ氏)など多彩な内容は、この山岳会の開かれた性格を現している。(平井吉夫)

市川静子・岡田敏夫・岡部紀正・川越はじめ・廣澤和嘉/共著

『日本300名山ガイド』

西日本編

『日本300名山ガイド・東日本編』の姉妹編として『西日本編』が出版された。執筆者、体裁その他は全く同じであり、内容は北アルプス、白山、北陸、近畿、中国、四国、九州の名山一五〇座のガイドである。これで本会選定の日本三百名山の完全ガイドが完成したことになる。各山ごとの懇切かつ正確なコースガイドと必要な地図名、コースタイム、問い合わせ先、地図と写真そしてコースの難易度が示されていることも姉妹編であるだけに同じである。新ハイキング社発行のガイドは何よりも最新情報であるだけに心強い。これで日本三百名山すべてが網羅され、三百名山ファンにとってよきバイブルとなるであろう。

平成六年四月 新ハイキング社発行
A5判 三二〇ページ 一、六〇〇円 (小倉 厚)

書籍受入報告 1994年3月

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
神奈川ヒマラヤ登山隊・編	スパンティーク全員登頂	128 pp/29 cm	神奈川ヒマラヤ登山隊	1994	発行者寄贈
山口 宏・編	Menthosa (メントーサ) 登山報告書; インドヒマラヤ登山隊1993	57 pp/26 cm	JAC 東海支部	1994	発行者寄贈
袴田和夫・著	箱根火山探訪 (かなしんブックスNo. 39) 箱根叢書	189 pp/18 cm	神奈川新聞社	1993	勝俣秀男氏寄贈
箱根の自然と文化研究会・編	箱根を歩く (かなしんブックスNo. 33) 箱根叢書	312 pp/18 cm	神奈川新聞社	1991	勝俣秀男氏寄贈
藤平正夫・著	登山と人生 (1993. 7. 7. 晩天講座・講演録)	54 pp/19 cm	富山県教育委員会	1994	著者寄贈
脇坂順一・著	八十歳はまだ現役; モンブランで傘寿を祝ったスーパーおじちゃん山行記	271 pp/19 cm	山と溪谷社	1994	著者寄贈

三水会現地集會

房州「高石山」

平成六年三月五日(土) 十五時三十分、内房線君津駅に集合。国民宿舎「清和」のマイクバスに乗り、一路宿へ向かう。夜の懇親会は、斎藤会長寄進の品などの「くじ引き」などで宴大いに盛り上がる。

翌日は八時三十分宿を出発。宿の前

は関東のヘラ鮎釣りのメッカ三島湖で、桜の季節にはさぞ賑やかだろう。高石第一トンネル前にて下車。勝田リーダーの指導で準備体操の後、登山開始。急な登りだが、まもなく石射太郎山(イシタロウ)に着く。なかなかの奇岩で、国体の岩登りに使用された由。尾根道に加賀葵の可憐な白い花を見つけた。気をつけて見ないと見落としてしまう。

高石山の肩にある観音堂で少し早い

山と医療

1993年
UIAA医療
委員会
公認基準に
ついて

中島道郎

UIAAとは UNION INTERNATIONALE DES ASSOCIATIONS D'ALPINISME (国際山岳連盟)の略称である。個人加入ではなく、国を代表する登山団体の集まりで、日本からは日本山岳協会が加入している。その中にいろいろな委員会があり、医療委員会もその一つである。

当委員会の活動の中「OFFICIAL STANDARD OF THE UIAA MEDICAL COMMISSION (UIAA 医療委員会公認基準)」の制定という仕事がある。第一編はトレッキ

ング・エクスペディション医学で、第一章「急性高山病 (AMS) および高所肺水腫 (HAPE) の緊急処置 (オスヴァルト・エルツ) および第二章「トレッキングおよびエクスペディションにおける健康管理に関する契約書の雛形 (フランツ・ベルクホルト)」、第二編は登攀時における血液媒介伝染病の人から人への伝播、となっている。

第一編は『登山医学』第十三号に紹介したのでここではその要約を示すに留める。第二章は短いのでその全文を紹介する。

これは、日本山岳会医療委員会の活動の一環として、以後、UIAA から連絡があり次第その全訳を紹介していきたいと念じている。(以下次号に続く)

昼食。

岩をくりぬいた岩壁を抜けると、ロープと梯子の登りで、高石山の山頂に着く。狭い頂上には小さな祠と錆びついた鍋がある。何かいわれがあるのだろうか。

春霞みの中での三百六十度のパノラマである。富士山、丹沢は見えなかったが、キラキラと光る東京湾、房総の各地を眺めていると、標高三一五メートルの山とはとても思えず、深山の趣を感じる。

急な山道を下って八良塚への尾根と分かれ、下山口の奥畑に向かう。途中で雪割草を見つけ、春の息吹を感じながらバス停へと進む。帰路はマイクバスで木更津へと向かう。

千葉県にもこんなよい山があったなんて、新発見の山行であった。参加者二十二名。(樋口公臣)

二火会懇親山行

春の奥多摩・御岳山

不況を騒ぐ世間の冷たい風を吹き飛ばすかのよう、立春を過ぎたとなんに暖かい日が続いていた。

二火会懇親山行に誘われた私は、躊躇する気持ちを振り払って、奥多摩御岳の集會に参加した。

毎月第二火曜日に集まり活動している様子は聞いていたが、時間的に無理もあって出たことはなかった。懇親山行だけの参加がためられた原因だったが、気軽に温かく迎えてくれた仲間

の気持ち嬉しかった。茅葺き屋根の宿「能保利」には三月五日午後五時、九名の女性が集まった。夕餉の膳を囲み、お酒も入って宴は盛り上がった。宿の気配りか、食べ終わることに温かい料理が運ばれてくる。

二火会は気兼ねなく何時でも自由に参加できて、そのつど皆で相談しながら活動の場を広げてゆく会と聞いた。翌日の山行についても、お互いに意見を合せての楽しい集いに、時間の経過も忘れていた。

六日は部屋から日の出を拝し、所々凍っている雪道を日の出山に向かった。好天に恵まれた暖かい山頂は、雪が解けて田圃の如く、素晴らしい展望を仰ぐ前に足元注意であった。

日の出山を下り、奥多摩の静かなコースに足を向けた。吉野梅郷の分岐から通矢尾根に出て、鉄塔の建つ展望のよい場所を選んで昼食にした。

肝要峠の途中にはわずかに不明瞭な箇所もあったが、木立ちに囲まれた暗い峠の面影は昔日の旅人を偲ぶ思いだった。近く林道を通すのであろうか、峠を下りた広場には工事用の重機が並

[実行実績および実行計画]

6/21 発足打ち合わせ 交詢社 委員全員で打ち合わせ

(講座)

- 10/2~3 第1回講習 木曾駒ヶ岳 受講者17名 指導者6名 千畳敷~濃ヶ池~駒ヶ岳
 11/28 第2回講習*国民生活センター 山の自然学の基礎と自然保護の話
 12/12 第3回講習 三頭山 開発行為が誘発した自然破壊の現況
 94/1/8 第4回講習*国民生活センター 自然学の講義
 1/30 第5回講習 秋川丘陵
 2/17~20 第6回講習 屋久島 地元の人を交えて勉強
 2/25 第7回講習*国民生活センター 自然保護活動の在り方

(実習)

- 8/29 (実習①) 北アルプス 空撮による登山道周辺の破壊状況の記録
 12/18 95/7/1 実習① J A C ルーム 空撮写真の解析の実習
 94/1/22~2/14 実習② 木曾駒ヶ岳 風蝕地形の調査指導

—以上は実施済み—

(講座)

- 3/20~21 第8回講習 高尾山 自分で見つけたフィールドで解説の実地訓練
 4/3 第9回講習 秋川丘陵 カタクリの咲く時期に、再びこの丘陵を調査
 4/16 第10回講習*秦野市文化会館ホール「山の自然保護を考える」のシンポジウムに参加
 5/28 第11回講習*国民生活センター 環境月間の各自の活動計画打ち合わせ
 6/1 ~30 第12回講習 全員希望する各地に散って研究、清掃や指導登山をする
 6/17~19 第13回講習 上高地、横尾、槍沢の氷河地形と植物 (定員30)
 6月下旬 —新規募集—
 6/25 第14回講習*国民生活センター 山の自然学入門、新参加者への説明会
 7/16 第15回講習*国民生活センター 各自の活動報告
 7/28~31 第16回講習 白馬山地 山の自然学の現地講座 (定員30)
 8/1 ~31 第17回講習 北ア等の山域で指導実習、新メンバーを案内する
 8/13~21 第18回講習 シエラネバダ 我々の体験と比較して実務を討論 (定員10)
 9/10 第19回講習*国民生活センター 山の自然学の基礎と自然保護の話
 各メンバーの活動報告
 9/23~25 第20回講習 白神山地 (定員30)
 10/8~10 第21回講習 木曾駒ヶ岳 しらび平~濃ヶ池~駒ヶ岳
 指導員を新たに加える (定員30)
 11/3~6 第22回講習 屋久島 指導実習、自然と人との共生に関する討議 (定員10)
 11/12 第23回講習 三頭山 開発行為が誘発した自然破壊の現場で
 11/20 ~23 第24回講習 屋久島 緑青年隊を加えたエコツアーの体験
 12/10 第25回講習*国民生活センター 山の自然学の中級講座
 95/1/21 第26回講習*国民生活センター 自然保護活動の在り方について
 2/16~19 第27回講習 西表島 日本の最南端の原生の山で自然保護を考える (定員20)
 3/11 第28回講習*国民生活センター 山の自然学の講義

(次期のテーマに夏の大雪山、春の白神、5月の屋久島、御蔵島、伊豆半島など)

(実習)

- 94/2/25 ~4/24 実習② 木曾駒ヶ岳 2回/月、千畳敷小屋より上部データを取りに行く
 観測の実体験
 10/8~95/3/25 実習② 木曾駒ヶ岳 風蝕地形調査実習のため、設備を改造して再び設置
 し、ウォッチを再開する
 3/25~30 実習③ ネパール ラリグラス植林実習のためゴラパニ地質調査と候補地
 アルマラの丘の調査およびマヘンドラグッパ村への協力依頼
 4/29~5/8 実習③ ネパール 森林保全実習のための調査と植林実習、アメダス設置
 8/好天日 実習① 日本アルプス 現状記録の空撮手法の実習、北アの要注意地と未
 調査の南アを対象に行う
 8/1 ~31 実習① 日本アルプス 空撮による現状記録と変化を地上の現地調査と対
 比する
 12/ 適日 実習① J A C ルーム 空撮写真の解析の実習、同時に一般への啓蒙
 10/ 適日 実習④ J A C ルーム 山の自然学説明マニュアル作り (日本語と英語)

べてあった。
 吉野梅郷の指導標にしたがって梅園に立ち寄った。日だまりの梅は蕾も膨らみ、開花を待つ客で茶店は賑わっていた。二火会懇親山行の仕上げは紅梅苑の「くず切り」。程よい甘さが口に広がり、見かわす目と目は楽しさにあふれて、明るい笑顔であった。参加者九名。
 (里見清子)

現況と参加のおすすめ

自然保護専門委員会

昨年の十月から始めたこの講座は順調に進展しています。これは自然保護活動を志す人、その指導者になろうと、思っている人を対象に、山の自然学を

通して、知識、経験を持ってもらおうと計画したものです。

都内の座学と現地学習が主体ですが、希望者には、空撮ウォッチ、気象観測、植林、マニュアル作りなどの実技習得もできるようにしています。

続けることに価値があります。現在七十名ほどの方たちが、新しい山の価値を発見して、毎回楽しく参加して

います。地球環境基金の助成を得て、六月から広く新規募集を行いますので、会員の方々もぜひご参加ください。途中からの参加も可能です。関心をお持ちの方は、日本山岳会事務局に置いてある申込書により、自然保護専門委員会にお申し込みください。
 ご参考までに今までの行動と今後の計画を掲載します。
 (大森弘一郎)

「山の自然学現地講座」

INFORMATION



◆「城ヶ島の地質」現地見学会

二火会

第二回の「現地見学会」を行います。

日時 六月四日(土) 現地集合・解散

場所 城ヶ島周辺

講師 神戸信和氏

参加ご希望の方は係(黒沢、高沢、熊谷)までご連絡ください。

◆「古き道を尋ねて」(1)

図書委員会

幾多の名僧が行き交い、武将たちが陣を張った小仏峠、徳川幕府が西の備えの要として千人同心を配して、その任に当たらせたとされる小仏の関へ、相模湖駅から歩いてみようと思います。

日時 六月十一日(土) 午前10時

集合場所 相模湖駅前(雨天決行)

参加者は直接お集まりください。

◆新緑と残雪の北八ヶ岳撮影会

フィルムビデオ委員会

山が萌える季節です。フォトビデオクラブと共催で撮影会を行います。

日時 六月二十五日(土)～二十六日(日)
場所 北八ヶ岳黒百合ヒュッテ周辺
(宿泊黒百合ヒュッテ)

人員 二十五名

参加希望者は日本山岳会フィルムビデオ委員会まで。六月十五日必着、官製はがきで申し込んでください。詳細は後日計画書ほか経費などをお知らせします。

◆新刊山岳図書目録

図書室の常備について

図書委員会

月例会で毎月の新刊山岳図書情報(日刊紙、雑誌、図書出版目録、その他刊行物の情報を収集・整理)をまとめ、一覧表にする作業を実施しています。皆様の便宜に供する目的で図書室新刊書受入れ欄に次のコピーを常備することになりました。ご利用ください。

一、新刊山岳図書目録(和文)

二、新刊山岳図書目録(英・仏・独・伊・西)

◆新着・購入、寄贈ビデオ紹介

フィルム・ビデオ委員会

今般左記作品を備えました。ご利用をお待ちします。

早稲田の山(寄贈)

高山植物(山と溪谷社)

尾瀬(山と溪谷社)

春に咲く花(山と溪谷社)

大雪山の花(山と溪谷社)

ふしぎな花の咲くブータン

北アルプスの野鳥

ブナ原生林・朝日連峰

南の島の原生林・屋久島・西表島

スイスアルプス(SONY)

フィルムからビデオに変換作品

場所 朝日アートギャラリー(銀座)

電話 〇三三五六七―一六七

日時 六月二日(木)～八日(水)

十八時三十分(五日、八日は十七時まで)

◆牧潤一、ヒマラヤ名峰展

穂高岳讃歌(神プロ)

アイガー北壁(NTV)

真川より黒部川、剣沢入り

(別宮貞俊作品)

穂高岳讃歌(神プロ)

アイガー北壁(NTV)

真川より黒部川、剣沢入り

(別宮貞俊作品)

穂高岳讃歌(神プロ)

アイガー北壁(NTV)

真川より黒部川、剣沢入り

(別宮貞俊作品)

穂高岳讃歌(神プロ)

アイガー北壁(NTV)

真川より黒部川、剣沢入り

(別宮貞俊作品)

穂高岳讃歌(神プロ)

アイガー北壁(NTV)

真川より黒部川、剣沢入り

(別宮貞俊作品)

図書管理委員会

往復はがきで図書管理委員会宛にお申し込みください。応募者多数の場合は抽選の上、結果をはがきでお知らせします。電話での問い合わせはご遠慮ください。書籍発送は6月20日頃、送料は各自負担です。

◆重複本の会員頒布

図書室にある重複本の一部を次の要領で希望者に頒布します。書籍は図書ラベル、蔵書印、廃棄印、および受入れ印(ペン記入)つきです。希望者は6月10日(必着)までに希望書名と返信用住所を明記の上、

頒布図書目録

- No 書名(注記)
- 1 日本アルプスと秩父巡禮(初版)
 - 2 RCC 報告 1931-1932(No. 4/5 合本製本)
 - 3 黒部(箱なし)
 - 4 大菩薩連嶺(改定第3版 箱カバーなし)
 - 5 大雪山: 登山法及登山案内
 - 6 奥秩父研究(カバーなし)
 - 7 南アルプスと奥秩父(箱なし)
 - 8 日本山岳志(黄ばみ・汚れあり)
 - 9 九州山岳大観
 - 10 双六谷(他者宛サイン入り 箱なし)
 - 11 鷗岳(箱なし)
 - 12 極地集誌
 - 13 詩集・登攀
 - 14 上高地(箱なし)
 - 15 槍ヶ岳を中心として
 - 16 赤石白峯山脈縦横記(箱つき)
 - 17 山を想へば(箱つき)
 - 18 千島の山(箱なし)
 - 19 Norway and its Glaciers(黄ばみ・汚れあり)
 - 20 Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan(別附録: 地図・写真あり)

- 著者名・頒価
- | | | |
|-------------------------|---------------------------|----------|
| 田部重治著・4500 円 | 出版社/年 | 北星堂/1919 |
| 中村勝郎編・5000 円 | RCC 本部/1932 | |
| 冠松次郎著・1500 円 | 第一書房/1931 | |
| 松井幹雄著・2000 円 | 光大社/1930 | |
| 小泉秀雄著・4000 円 | 大雪山調査会/1926 | |
| 原 全教著・1000 円 | 朋文堂/1959 | |
| 山梨縣山林會編著・1000 円 | 改造社/1931 | |
| 高 頭式編・2500 円 | 東京博文館/1906 | |
| 加藤数功著・1000 円 | 筑紫山岳會/1936 | |
| 冠松次郎著・4000 円 | 第一書房/1930 | |
| 冠松次郎著・1000 円 | ダイヤモンド/1929 | |
| 加納一朗著・500 円 | 朋文堂/1941 | |
| 秋谷 豊著・1000 円 | 国文社/1962 | |
| 矢ヶ崎榮次郎編・500 円 | 筑摩電気鐵道/1928 | |
| 福澤桃介著・500 円 | ダイヤモンド社/1924 | |
| 原口 亨著・2000 円 | 洛陽堂/1918 | |
| 百瀬慎太郎著・10000 円 | 百瀬慎太郎遺稿集刊行/1962 | |
| 長谷川清三郎著・1500 円 | 梓書房/1934 | |
| Forbes, James D 10000 円 | Adam & Charles Black/1851 | |
| Filippi, F.D. 40000 円 | Edward Arnold & Co/1931 | |

・会務報告

三月定例理事会

日時 三月十日(木) 十八時三十分～
二十時三十分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 藤平会長、鳴原、中村各副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、南川、松浦、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、中川、山本、大谷各理事、川崎監事、斎藤、西村、神崎、重廣各常任評議員

【委任】 伊藤理事、中島監事、湯浅、宮下各常任評議員

◆議事

【審議事項】

一、GACネパール登山隊一九九四の都岳連への推薦について 村井

学習院山桜会、学習院輔仁会山岳部のランタンヒマール・ドルジェラクパ峰登山の推薦状要請が、計画書および高野隊長の説明でなされた。承認

二、重複本の会員頒布について 水野

重複本の一部、さしあたり二十冊を頒布する。会報に掲載し、申し込みは葉書のみとする。承認

三、「山岳」掲載文の転載依頼について 小倉

岩波新書「自然保護という思想」に「山岳一九八七年」掲載の沼田真会員

の「今日の自然保護の諸問題」の転載依頼があった。承認

四、平成五年度事業報告および平成六年度事業計画(案) 中川

原案どおり

五、平成六年度予算(案) 大倉

各委員会担当理事と折衝終了、一部補正した。承認

六、現ルーム・リフォームおよび一〇四号室賃借について 小倉

現ルームは手狭になっており、九十周年事業の一つとして、その改善策を検討されていたが、今回、奥の一〇四号室がリリースに出されたので、その借り入れおよびリフォームが常務理事会で承認された。工事は夏休み期間とし、その間、事務室は一〇四号室に移す。荷物の移動についてはヒヤリングを重ね、コンセンサスを得る。承認

七、三月議事録署名人の委嘱について 小倉

文部省提出のために、中川武、南川金一会員にお願いする。承認

【報告事項】

一、組織の見直し、担当委員について 小倉

中島監事から平林克敏、飯野亨両会員に委嘱し、三名で当たる。

二、「青年登山懇談会」支部事務局担当者会議について 中川

二月二十六日、二十七日、八王子市

大学セミナーハウスで開催され、四名が参加。

三、山岳研究所開所について 溝口

四月二十九日に山研委員が行き、三日夜から一般会員の宿泊は可能。受け付けは、五月八日までは事務局、五月九日からは管理人まで。

四、島田異名譽会員の計報 小倉

三月八日死去。三月十五日通夜、十六日告別式。

五、一九九二年・ナムチャバル写真展開催について 小倉

四月二十九日～五月三十一日、滋賀県多賀町・ダイニックスアストロパーク天究館で開催予定であるが、重廣会員から、写真撮影読売新聞の社名を掲示すれば版權の問題はない旨説明があり、資料委員会山口理事が対応する。

六、自然保護専門委員会から 大森

山の自然保護指導者要請の講座をすすめている。今回も地球環境基金の助成を申請する。

七、「訪台交流登山」準備状況 大谷

三月九日現在、雪山隊三十名、合観山隊十一名。三月二十三日、打ち合わせ会を開催する。

【委員会報告】

●青年部 青登懇打ち合わせ(二月十八日)、最終打ち合わせ(二月二十四日)、第一回日本山岳会青年登山懇談会(二月二十六、二十七日)、第二次

キルギスタン隊打ち合わせ(三月七日)

●総務委員会 新入会員オリエンテーション・於食糧会館(三月十七日)、総会、支部長会議・於JABビル(五月二十一日)

●集委員会 サクラハイイク・高川山(四月十日)、若葉会山行・青森支部山行、青森ウエストン祭と合同で行う(五月二十八、二十九日)

●図書委員会 山岳史懇談会(二月二十五日)は満員の盛況で感謝。「地図を使った風景スケッチ入門」の講師は山口裕一会員の予定。

【新入会員承認】

福島正明他十六名。復活一名。

三月臨時理事会

日時 三月十七日(木) 十八時三十分～二十時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 藤平会長、鳴原副会長、小倉、大森、村井、山口、南川、伊藤、南井、渡邊、溝口、中川、山本、片岡、堀井各理事、中島、川崎各監事、宮下、重廣、神崎各常務評議員

【委任】 中村副会長、大倉、水野、大谷各理事、西村、湯浅各常任評議員

◆議事

【審議事項】

一、マカール登山隊一九九五の組織について 会長

総隊長・藤平会長、登山隊長・重廣

恒夫、登攀隊長・山本宗彦

「実行委員会」委員長・藤平正夫、副委員長・嶋原啓佑、委員・小倉茂暉、村井龍一(事務局)、大倉昌身(事務局長)、重廣恒夫(事務局)、橋本清、伊丹紹泰、渡邊雄二(事務局)、片岡泰彦、堀井昌子、山本宗彦、相馬勉、大谷亮、山本篤、梶田正夫、飯田肇 承認
承認の後、重廣登山隊長から決意表明があった。

二、帝国ホテル広報誌「インペリアル」ウエストーン特集の資料掲載依頼 小倉 承認

三、「山と溪谷」四月号に松方三郎元会長の写真掲載依頼について 小倉 承認

「報告事項」

一、「サンビュハイツ四番町」一〇四号室賃借交渉経過について
二、新入会員オリエンテーション(三月十二日)について

新入会員五十名。会長、嶋原副会長以下七十名の参加者で、盛会だった。

・ルーム誌

(3月)

- 1日 図書委員会
- 2日 マカール小委員会
- 5日 青年部
- 7日 図書委員会 連絡委員会
- 8日 二火会

9日 山研委員会 指導委員会 アル

10日 パイン・フォトビデオクラブ

11日 常務理事会 理事会

12日 会報委員会 青年部 自然保護委員会

14日 拡大常任評議員会 マカール小委員会 自然保護専門委員会

15日 アルパイン・スキークラブ

16日 科学委員会 スケッチクラブ

17日 三水会

18日 臨時理事会 指導委員会

22日 総務委員会 自然保護委員会

23日 指導委員会

25日 図書委員会

28日 集委員会

3月来室者590名

■会員異動・3月

▼物故 外山義夫(一六六四) 5・12

18 花井馨(二三六四) 6・2・4

島田 巽(一二二七) 6・3・8 広

滝政子(一一三〇) 6・3・13 ▼

退会 松本慎太郎(七四二二) 6・3

・31 金箱正美(三八三六) 6・3・

31 井上一男(六五八一) 6・3・31

古我亮一(一〇〇五六) 6・3・31

古我 静(八八三四) 6・3・31 小

林猛臣(六一六七) 6・3・31 三浦

隆(九二二七) 6・3・31 岡崎恒夫

(五四六七) 6・3・31 久保一陽

(八三七六) 6・3・31 ▼姓名変更

砂押典子(一〇五六九) ↓背戸典子

■山研のFAX番号訂正のお知らせ

山研運営委員会

このたび発行の「日本山岳会のお知らせ」三十二ページに記載の上高地山研のFAX番号〇二六三一九五―二五三五を―二六三五に訂正します。

■訂正 五八六号(三月号)十四ページ四段十一行「二枚・三枚」を「二級・三級」に、お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

各支部からのおたより、ありがとうございます。十五支部から原稿をいただきましたが、誌面のつこうで、静岡、東海、岐阜、京都、東九州、熊本の六支部は次号に回しました。ご了承ください。

また、春から夏にかけての支部の行事や山行の記録などもお寄せください。次号は「総会」の特集です。(T・I)

日本山岳会会報 山 588号

1994年(平成6年)5月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町

5-4 サンビュウハイツ

四番町

TEL 東京(03) 3261-4433

振替口座 東京 3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 技報堂